

シーボルトとペッテンコーフェルの墓

泉 彪之助

晩年、故郷ビュルツブルグに隠棲したシーボルト (Philipp Franz von Siebold) がミュンヘンで客死し、墓がミュンヘンにあることはよく知られている。しかし私がミュンヘンへ行く機会に墓を訪れようとしたところ、場所がなかなか分からなかった。幸い地図の上で墓地を確定できたので、ミュンヘンでは公共交通機関を使ってそこへ行って見た。その翌日、ミュンヘン大学医史学研究所ロツハー医師、同大学内科ライセンヴェーバ医師の案内で墓を訪れたが、そのとき、同じ墓地に衛生学者ペッテンコーフェル (Max von Pettenkofer) の墓もあること、またこの墓地に埋葬されている著名人についての文献があることを教えられた。

実際に訪問して見ると、墓地はミュンヘンの中心に近く、行くのはむずかしくない。墓は私人としての最後の場所であり、観光や見物の対象にすべきものではないが、両先達が日本医学に残した功績の大きさを考えると、ミュンヘンを訪れた機会に墓を一目見て敬意を表したいと考える医史学研究者は少なくないであろう。とくにシーボルトとペッテンコーフェルの墓が、同じ墓地のしかもすぐ近くにあることはあまり知られていないと思うので、分かったことを記しておきたい。

文中の地名は、街路名を記した地図なら簡単に見つけられるので、図はつけなかった。私が使った中で便利だったの

は、日本でもドイツ政府観光局などで入手できる、ミュンヘン観光局発行の「ミュンヘン市街地図」(日本語、地名はドイツ語)であった。

一、シーボルトの墓の場所

シーボルトの墓の位置は、呉先生の『シーボルト先生、その生涯及び功業』^(一)では「ミュンヘンの新き南の墓地 Neuer südlicher Friedhof」としている。一方、板沢武雄氏の『シーボルト』^(二)では「ミュンヘンの『南の旧墓地』」と、また宗田先生の『図説日本医療文化史』^(三)では「ミュンヘン旧南墓地(三三地区一三列五号)」となっている。

ミュンヘンの地図でこの墓地を探そうとすると、新南墓地(Neuer Südfriedhof)は容易にみつかるが、Alter Südfriedhofは存在せず、またこの新南墓地も原語が呉先生の記載と異なっている。

一方『シーボルト父子伝』^(四)を見ると、「ミュンヘンのタール教会通りの南旧墓地(二三区一三列五号)」とある。このタール教会通りを手掛りに探したところ、Südlicher Friedhofを探し当てることのできた。^(五)

注…ここでタール教会通りと訳されている原語は Thalkirchnerstrasse ではなく、またミュンヘンには Thalkirchen という地域があるので、タールキルヒェン通りと訳すべきでないかと思われる。専門家の意見を伺いたい。

結論的に言うると、シーボルトおよびペッツェンコーフェルの墓はミュンヘンの Südlicher Friedhof にある。後に述べるように、一九四三年十二月三十一日を最後にこの墓地では新しい埋葬が行われなくなったので、Südlicher Friedhof を Neuer Südfriedhof と区別して旧南墓地と呼んだのであろう。しかし一方では、Südlicher Friedhof の北約三分の二を Alter südlicher Friedhof と、南約三分の一を Neuer südlicher Friedhof と書いている地図があり、^(五) 呉先生が記載されているのはこの意味である。この差は恐らく調査の時期によるもので、呉先生が調査された時はまだ墓地が使用されていたのに比べ、板沢、宗田両氏の場合は、すでに墓地としては閉鎖されていたために上のように呼ばれたのではなから

うか。ちなみに先に述べた「ミュンヘン市街地図」では、ただSüdlicher Friedhofとなっている。

1) Südlicher Friedhof の位置と行き方

ここでは公共交通機関での行き方を述べる。

ミュンヘン中央駅から地下鉄一番線、二番線に乗ると、次の駅がゼントリング門 (Sendlinger Tor) である。ここはかつて城壁に同名の門があったところで、今も当時の門が残されており、広場になっている。このゼントリング門広場から西南に伸びる大通りがリントウルム街 (Lindwurmstrasse) で、このリントウルム街とイザール川が作る平行線の間を斜めに走るのがタールキルヒエン通りである。Südlicher Friedhof は、このタールキルヒエン通りの東側に沿って存在する。

中央駅とミュンヘンの中心マリエン広場の間にあるのがカルル広場 (Karlsplatz) で、その北のマキシミアン広場にはベッテンコーフェルと化学者リービッチ (Justus von Liebig) の記念像がある。カルル広場から南行きの市電十八番線に乗っても、ゼントリング門は次の駅である。

タールキルヒエン通りはゼントリング門広場へ直接に入っているが、墓地の入り口まで距離があるのでバスを利用することをすすめたい。三一番のバスは、タールキルヒエン通りを北上して来て、ゼントリング門広場で方向を変え、しばらくリントウルム街を走った後左に曲がり、やがてまたタールキルヒエン通りに入って南下する。したがってこのゼントリング門広場で三一番バスに乗りさえすれば、Südlicher Friedhof の近くへ行ける。三一番バスの乗場は、広場の西寄りでリントウルム街の始まるところにあり、市電の停留所に近い。

南下するバスがふたたびタールキルヒエン通りに入ったところがワルター通りのバス停だが、ここまで来ると正面の塀の中に緑が見え、墓地であることが分かる。しかしここで下りずに次のバス停カプツイン通り (Kapuzinerstrasse) で

下りの方がよい。このバス停は、タールキルヒェン通りとカプツイン通りとの十字路にあるが、バスを降りるとカプツイン通りの北側に沿って鳶に囲まれた赤レンガの塀が見え、これが Südlicher Friedhof の南の境界である。そのまん中に簡素な入り口があり、門を入ると墓域を示した説明板がある。

先に述べたように、Südlicher Friedhof は古い部分と新しい部分と二つに別れ、両者の間にはっきり離れているが、墓域の番号は共通で、一区から二六区までが旧部分、二七区から四二区までが新部分である。区の原語は、後述の文献では Sektion、またライゼンヴェーバ医師によれば Parzelle ともいう。

Südlicher Friedhof で墓を探すのに重要なのは、墓域の番号(シーボルト三三区、ベッテンコーフェル三二区)である。三三区へ行くと、特徴のあるシーボルトの墓が見え(写真1)、すぐ分かる。これに対し、三二区のベッテンコーフェルの墓(三二一—三二四)は平たい黒い墓で、やや分かりにくい(写真2)。番号を参照しながら、三二区の外側の道に沿った所を丹念に探すと見付かる筈である。

三、Südlicher Friedhof の文献と歴史

Südlichen Friedhof に埋葬されている有名人について、“Berühmte Tote im Südlichen Friedhof zu München”^(六)という文献がある。この本は、Südlicher Friedhof に埋葬されている約五百人の政治家、学者、芸術家、聖職者、企業家など著名人の墓の位置、経歴を記載したもので、「十九世紀ミュンヘンの歴史をまのあたりにする」(同書序文より)力作である。シーボルトもベッテンコーフェルも書かれている。一九六九年に第一版が出版され、現在改訂四版(一九八三年)が刊行されている。

この本は出版年度が少し古いこともあって入手しにくく、私もロッハー医師の案内でミュンヘン市内三軒の書店で探したが手に入らなかった。三軒目の書店で教えられて、マリエン広場の市庁舎の正面にある大きな書店のバイエルン関



写真1 シーボルトの墓とその周囲



写真2 ペッテンコーフェルの墓

係図書コーナーで聞いたところ、すぐ探して渡してくれた。

この本の記載にしたがって、Südlicher Friedhofの歴史を簡単に述べたい。

ミュンヘンで初めてのころ作られたいくつかの墓地は、城壁内であったため拡張できず、一五六三年のペスト流行に際して墓地が足りなくなった。そのため、ゼントリング門の前に新しく墓地が作られた。城壁の外であったため「外の墓地 (der Äussere Freihof)」と呼ばれたという。墓地は、長い月日の間に少しずつ広げられ形をととのえたが、一八四四年に現在の新部分が作られた。

しかしその新部分も一杯になったので、Südlicher Friedhofでは一九四三年十二月三十一日以降新しい埋葬は行われなくなった。当時の墓の数は約二万四千とされている。

墓地は第二次大戦中に連合軍の空襲によって大きな損害を受けたが、戦後再建された。

四、ペッテンコーフェルの墓

シーボルトの墓はすでに文献に詳しく記載されており、とくにつけくわえることはない。この墓も第二次大戦中に損傷を受けたのではないかと思われるが、よく分からない。

ペッテンコーフェルの墓は第二次大戦中に破壊され、ミュンヘン大学ペッテンコーフェル研究所の Hermann Eyer 教授によって再建された。^{(七)(八)}戦前、一九三八年にペッテンコーフェルの墓を訪れた故森下薫大阪大学名誉教授によると、当時の墓碑銘は“Familiengrab von Dr Max von Pettenkofer”となっており、また墓の上に女神像があった。^(七)再建された墓碑では、女神像はなく、墓碑銘はただ“Max von Pettenkofer 1818 1901”となっている(写真3)。

謝辞

この調査に種々ご援助いただいたミュンヘン大学医学史学研究所 Dr. Wolfgang Roher、同大学内科 Dr. Heidrun Reissenweber、同大学 Max von Pettenkofer 研究所 Gorthard Ruckdeschel 教授、吉村裕之金沢大学名誉教授、日本新薬株式会社、またご意見を伺った先輩各位に謝意を表する。



写真3 ペッテンコーフェルの墓碑銘

文献

- (一) 吳秀三『シーボルト先生、その生涯及び功業2』一九六頁、平凡社、一九九〇(平成二年)
- (二) 板沢武雄『シーボルト』二五四頁、吉川弘文館、一九八九(平成元年)
- (三) 宗田一『図説日本医療文化史』二六八頁、思文閣出版、京都、一九八九(平成元年)
- (四) ハンス・ケルナー著、竹内精一訳『シーボルト父子伝』一五〇頁、創造社、一九七四(昭和四十九年)
- (五) 地図:Falkplan "München", Falk Verlag, Hamburg
- (六) Max Joseph Hufnagel: Berühmte Tote im Südlichen Friedhof zu München, Zeke Verlag, Würzburg, 1983
- (七) 森下薫「ミュンヘン大学衛生学教室」『ある医学史の周辺』三〇三—三二二頁、日本新薬、京都、一九七二(昭和四十七年)
- (八) 吉村裕之「ヨーロッパの医跡探訪二題」『病原体を追った人びと』一二二—一二六頁、北國出版社、金沢、一九八八(昭和六十二年)

(福井県立大学看護短期大学部)